

エッセイ

# 新橋界隈の変遷②

瀬崎 明 (会員)

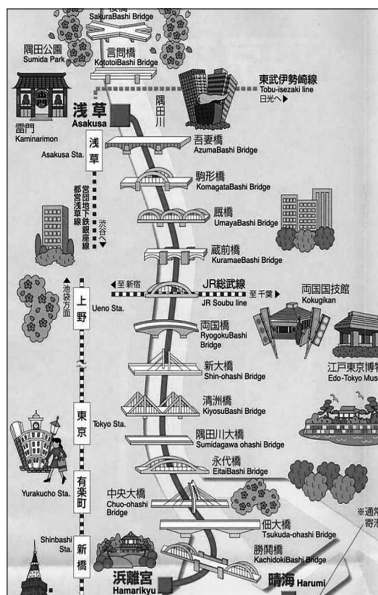
黒船来航であわてふためく幕府の様子を風刺した有名な狂歌「太平の眠りを覚ます上喜撰(じょうきせん：お茶の銘柄)は、たった四杯で夜も寝られず」は、上手過ぎる句で後代に作られたとの論評もあった。最近、この句は当時のものだったとの実証が発見されたそうだ。日米修好通商条約などで横浜、長崎、神戸、大阪、東京などに外国人居留地が設けられたが、築地居留地は鉄砲洲の10鈔を区切り造られた。築地の居留地に公館を置けば大名屋敷が近いため貿易に利があると米国は考えたようだ。ところが幕府が瓦解し、あてにしていた大名たちは消えてしまった。外国人も商売に有利な外港のある横浜へ行ってしまい築地

居留地は期待外れのものとなった。居留地はその後、米の空

相場、酒や阿片の密売なども行われ、治外法権で司法の手が出せない場所となり条約を引き継いだ明治政府は手を焼いた。不平等条約は1899(明治32)年に改正され、やっと居留地は廃止になった。とは言え、ここに住んだ外国人のなかには文化、学問、技術の伝道に尽力した人物もいて、日本の近代化に大きく寄与した。キリスト教伝道などもあり、青山学院や女子学院明治学院、関東学院、雙葉学園などの発祥にも係っている。長崎にいたシーボルトの娘イネもここに婦人科医院を開いた。この地のシンボルとなっている聖路加国際病院もここが発祥地で

あるが、病院が建つところは米国公使館が現在の赤坂溜池(大使館)に移る前の場所であった。ここには赤穂浪士の主家浅野家の上屋敷があった。吉良を討ち取った浪士が両国の吉良邸から泉岳寺に凱旋したルートは、隅田川に沿って屋敷跡を通る約13km。中間地点の善隣協会傍を抜けたとされる。そのルートをたどるツアーも企画されているが、浜離宮までは楽な水上バスをお勧めする。居留地跡に隣接する旧築地市場(東京都中央卸売市場築地市場)は東京都が所有する11か所の卸売市場の1つであった。80数年の歴史を持つ最大の市場だったが、手狭となったた

てせりが行われ、ピーク時の2005年取扱数量は、全品目合計で約91万6866ト(1日当たり水産物2167ト、青果1170ト)、金額にして約5657億円であった。筆者も、移転計画から豊洲の環境調査などに係ったことがある。旧市場は協会から近かったが移転先の豊洲市場は隅田川を渡り、月島、晴海埠頭と続く埋立地豊洲埠頭にある。その先にも有明地区、青海地区と湾岸埋立地が広がっている。新橋に繋がる道路は水域を橋や海底トンネルで横断し続けている。有明や青海地区には2020年東京オリンピックの競技場が設置されている。



水上バス航路

めに20年ほど前に対策が計画された。現在移転先が豊洲市場である。旧市場は面積も他市場と比べ最大で、約23鈔あった。7